

## 名古屋学院大学人間健康学部

### リハビリテーション学科における学業成績の調査

——入試区分の違いによる検討——

赤木 充宏・日比野 至・肥田 朋子・平野 孝行

#### 要 約

名古屋学院大学人間健康学部リハビリテーション学科に入学した学生の入試区分の違いによる入学後の学業成績の傾向を知る目的で、入学時の受験状況から、指定校推薦、一般推薦、一般入試に区分し、①入試区分からみた入学後の動向、②各入試区分による1年次学業成績の比較、③指定校推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係、④一般推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係、⑤一般入試入学者の入試成績と1年次学業成績との関係、⑥一般入試入学者の入試科目別成績と1年次学業成績との関係の6項目に分けて調査を行った。対象は、2006～2009年度に本学科へ入学した335名とし、学業成績の調査には、学内成績評価基準であるGrade Point Average (GPA)を用いた。その結果、①一般入試による入学者に比べ、推薦入試による入学者の方が退学・除籍および転学部・転学科者が多かった。②学部共通GPAのみ、指定校推薦群と後期入試群との間で有意差が認められた ( $p<0.05$ )。③小論文の成績と1年春学期および1年終了時GPAとの間に弱い相関が認められた ( $p<0.05$ )。高校評定平均値と1年次学業成績との間に弱い相関が認められた ( $p<0.01$ ,  $p<0.05$ )。④小論文の成績と1年終了時、全学共通GPAとの間に弱い相関が認められた ( $p<0.05$ ,  $p<0.01$ )。⑤一般入試成績の平均点と1年次学業成績との間に弱い相関が認められた ( $p<0.01$ ,  $p<0.05$ )。⑥理科の入試成績と1年春学期、全学共通および専門基礎GPAとの間に弱い相関が認められた ( $p<0.05$ )。

#### はじめに

文部科学省による平成22年度学校基本調査速報<sup>1)</sup>では、高等教育機関への進学率(過年度高卒者等を含む)は79.7%、大学・短期大学への進学率(過年度高卒者等を含む)は56.8%となり、高校などを卒業した者の半数以上が大学・短期大学へ進学する状況にある。一方で、理学療法士を養成する大学・専門学校は、近年の相次ぐ理学療法士養成施設の開学や開設数の増加により、2010年7月現在、全国に総数249校あり、総定員数は13,224名である<sup>2)</sup>。これに対し、少子化や社会状況の諸変化などの影響も

あり、全国的にも既存の養成施設の入学受験者倍率は、この2、3年減少傾向にある。このような条件の下では、学習意欲が乏しく、理学療法士養成課程を修了し得る学修能力が不足している志願者が入学してくることが懸念されている<sup>3),4)</sup>。その中で、我々にとって理学療法士を目指す学生の学修能力と理学療法士としての適性をもった人材を選抜することはますます重要となってくる。

名古屋学院大学人間健康学部リハビリテーション学科理学療法専攻(以下、本学、本学科)は、2006年4月に開設された。本学における入学試験(以下、入試)は、選抜方法および入試

機会が複数あり、本学科では、推薦入試と学力型入試により学生を受け入れている。推薦入試には、一般推薦入試（以下、一般推薦）と指定校推薦入試（以下、指定校推薦）の2種類がある。一方、学力型入試は、一般入試、大学入試センター試験の一部と一般入試の一部の組み合わせ方式（以下、センタープラス方式）および大学入試センター試験を利用する入試（以下、センター試験利用入試）に区分されている。さらに一般入試は、前期、中期および後期に区分され、センター試験利用入試は、前期および後期に区分されて、それぞれ行われている。

推薦入試による入学者は、理学療法士を目指すという目的意識を持っている者が多く、また学力型入試による入学者は、高等教育機関の入試に対する取り組みから、学力において一定の水準が確保されていることが推測できる。一方で、推薦入試では、面接、小論文、基礎学力試験および調査書による選抜が行われるため、一般入試による入学者に比べ、学力的に差が生じているのではないかと考えられる。そのため、今回我々は、入学者選抜方法の見直しなどの資料を得ることを目的とし、入試区分の違いにより学業成績に差があるかを調査した。

## 対象および方法

本調査の対象は、2006～2009年度に本学科へ入学した合計335名としたが、成績との検討においては、途中で退学・除籍、転学部・転学科および休学（長期欠席を含む）した29名を除外し、2006年度入学者77名、2007年度入学者78名、2008年度入学者74名、2009年度入学者77名の合計306名とした。

対象者は、入試区分から推薦入試群、一般推薦群に大きく分け、さらに各入試区分により分

類した。

本学における学業成績については、名古屋学院大学キャンパスコミュニケーションシステム（Campus Communication System；以下、CCS）より得られる各授業科目の成績情報をもとに、Grade Point Average（以下、GPA）を算出した。各授業科目は、本学の成績評価基準により、100～90点を「S」、89～80点を「A」、79～70点を「B」、69～60点を「C」、59点以下を「D」で評価されている。そこで、各成績に与えられるGrade Point（以下、GP）、S=4、A=3、B=2、C=1、D=0を用い、以下のGPA算出式により調査に必要なGPAを算出した。ただし、GPAを算出するに当たり、評価がP（合格）およびR（認定）である科目は除外した。

GPA算出式：

$$GPA = \frac{\sum (\text{授業科目のグレードポイント} \times \text{単位数})}{\sum (\text{履修登録単位数})}$$

一方、調査資料として、各対象の入試区分および入学試験科目の得点は、入学時の資料から得た。学力型入試の成績は、入試成績合計の平均点および各教科の素点を用いた。推薦入試の成績は、小論文、基礎学力試験、面接および高校評定平均値を用いた。小論文および面接は、すべての年度において段階評価であったため、今回の調査では段階評価成績を得点化（小論文・面接：「AA」：5点、「AB」「BA」：4点、「BB」：3点、「BC」「CB」：2点、「CC」：1点）して用いた。なお、センター試験利用入試およびセンタープラス方式による入学者においては、入試形態が異なるため今回の調査から除外した。

本調査に利用したデータは、個人が特定できないように処理を行い、データの管理については、外部に情報が流出しないようにした。

調査項目は以下の6項目とし、各分析に必要なデータはSPSS 15.0J for Windowsで処理し、統計解析を行った。なお、検定に先立って、データが正規分布に従うかをシャピロ・ウィルク検定で確認した。すべての検定における有意水準は、 $p=0.05$ とした。

#### 1) 入試区分からみた入学後の動向

2006年度から4年間の推薦入試群および学力型入試群の入学者において入学後の動向について3年終了時まで、退学・除籍、転学部・転学科および休学（長期欠席を含む）した人数を比較し、入試区分の違いにより偏りがみられるかを分析した。入試区分は、推薦入試群と学力型入試群に区分し、クロス集計後Fisherの方法により検定した。

#### 2) 各入試区分による1年次学業成績の比較

推薦入試群を指定校推薦群と一般推薦群に分け、一般入試群を一般入試前期（中期を含む、以下、前期入試群）と一般入試後期（以下、後期入試群）の計4群に分けた。各入試群間の1年春学期、1年終了時GPAの平均値について比較した。さらに、本学および本学科の教育課程の体系から1年次に履修した科目を、全学共通科目群（以下、全学共通）、学部共通科目群（以下、学部共通）および専門基礎科目群（以下、専門基礎）に区分して、それぞれのGPAの平均値について比較した。各入試群間の比較・検討には分散分析を行い、その後の検定においては、Games-Howell法を用いた。

#### 3) 指定校推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

指定校推薦入学者の入試における得点化した小論文、面接の点数および高校評定平均値と1

年春学期、1年終了時GPAおよび1年次に履修した全学共通、学部共通および専門基礎GPAとの関係を知るために、Spearmanの順位相関係数を求めた。

#### 4) 一般推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

一般推薦入学者の入試における得点化した小論文、面接の点数、基礎学力試験成績および高校評定平均値と1年春学期、1年終了時GPAおよび1年次に履修した全学共通、学部共通および専門基礎GPAとの関係を知るために、Spearmanの順位相関係数を求めた。なお、選抜方法の変更により小論文試験が行われなかった2009年度入学者のデータについては除外した。

#### 5) 一般入試入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

一般入試（前期、中期および後期）入学者の入試成績と1年春学期、1年終了時GPA、1年次に履修した全学共通、学部共通および専門基礎GPAとの関係を知るために、Spearmanの順位相関係数を求めた。

#### 6) 一般入試入学者の入試科目別成績と1年次学業成績との関係

一般入試（前期、中期および後期）入学者の入試科目別成績と1年次学業成績との関係を知るために、Spearmanの順位相関係数を求めた。入試科目成績として、国語、英語、数学、理科の得点を用いた。理科については、物理、化学、生物3教科から1科目の選択であったが、選択科目の素点を理科の得点とした。

表1 入学後の動向

入試区分と人数		退学・除籍者数	転学部・転学科者数	休学者数 (長期欠席を含む)
推薦入試群	197	10 (5.1%)	12 (6.1%)	1 (0.5%)
学力型入試群	138	4 (2.9%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)
合 計	335	14 (4.2%)	13 (3.9%)	2 (0.6%)

表2 各入試区分の違いによる GPA の比較

	(推薦入試群)		(一般入試群)	
	指定校推薦群 (n=100)	一般推薦群 (n=74)	前期入試群 (n=58)	後期入試群 (n=61)
1 年春学期	2.40 ± 0.51	2.32 ± 0.51	2.25 ± 0.47	2.27 ± 0.56
1 年終了時	2.48 ± 0.45	2.37 ± 0.50	2.29 ± 0.49	2.30 ± 0.51
全学共通	2.76 ± 0.43	2.65 ± 0.47	2.54 ± 0.57	2.60 ± 0.55
学部共通	2.63 ± 0.61	2.49 ± 0.66	2.39 ± 0.64	2.36 ± 0.65 <sup>*1</sup>
専門基礎	1.86 ± 0.64	1.76 ± 0.60	1.73 ± 0.51	1.71 ± 0.56

平均値±標準偏差

<sup>\*1</sup>；指定校推薦群との有意差 ( $p<0.05$ )

## 結果

### 1) 入試区分からみた入学後の動向に関する調査結果

2006年度から4年間の入学者において入学後の動向について、3年終了時までには、退学・除籍、転学部・転学科および休学（長期欠席を含む）の人数を調査した結果は表1の通りであった。推薦入試群197名中、退学・除籍者は10名（5.1%）であったのに対し、学力型入試群は138名中、4名（2.9%）であった。転学部・転学科者は、推薦入試群12名（6.1%）であったのに対し、学力型入試群は1名（0.7%）であり、Fisherの片側検定で危険率 $p=0.009$ を示した。推薦入試群では学力型入試群に比べ転学部・転学科者が多かった。また、退学・除籍および転学部・転学科などの進路変更をした人数は、推薦入試群22名（11.2%）であったのに対し、学力型入試群は5名（3.6%）であり、

Fisherの片側検定で危険率 $p=0.009$ を示し、推薦入試群では学力型入試群に比べ進路変更をする者が多かった。

### 2) 各入試区分による1年次学業成績の比較

各入試区分による1年次学業成績を比較した結果は表2の通りであった。指定校推薦群の学生のGPAの平均値は、いずれの項目においても他の入試群より良好であったが、学部共通GPAの平均値のみ、指定校推薦群と後期入試群との間で有意差が認められた ( $p<0.05$ )。

### 3) 指定校推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

指定校推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との間の相関係数は表3の通りであった。小論文の成績と1年春学期および1年終了時GPAの間の相関係数は、それぞれ $\rho=0.255, 0.209$ で弱い相関が認められた ( $p<0.05$ )。高校評

表3 指定校推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

	1年春学期	1年終了時	全学共通	学部共通	専門基礎
小論文	0.255 *	0.209 *	0.192	0.158	0.136
面接	0.079	0.044	0.029	0.025	0.051
高校評定平均	0.286 **	0.323 **	0.160	0.281 **	0.348 **
相関係数;Spearman の順位相関係数				** p<0.01	* p<0.05

表4 一般推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

	1年春学期	1年終了時	全学共通	学部共通	専門基礎
小論文	0.239	0.298 *	0.345 **	0.263	0.188
面接	0.226	0.107	0.019	0.105	0.158
基礎学力試験	0.161	0.075	0.034	0.083	0.088
高校評定平均	0.103	0.178	0.133	0.162	0.139
相関係数;Spearman の順位相関係数				** p<0.01	* p<0.05

表5 一般入試入学者の入試成績と各 GPA との相関

	1年春学期	1年終了時	全学共通	学部共通	専門基礎
相関係数	0.317 **	0.286 **	0.208 *	0.289 **	0.282 **
有意確率(両側)	0.000	0.002	0.023	0.001	0.002
相関係数;Spearman の順位相関係数				** p<0.01	* p<0.05

定平均値と1年春学期, 1年終了時, 学部共通および専門基礎GPAの間の相関係数は,  $\rho = 0.281 \sim 0.348$ で弱い相関が認められた ( $p < 0.01$ )。面接の成績は, 1年次学業成績との間には相関が認められなかった。

#### 4) 一般推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

一般推薦入学者の入試成績と1年次学業成績との間の相関係数は表4の通りであった。小論文の成績と1年終了時, 全学共通GPAの間の相関係数は, それぞれ  $\rho = 0.298, 0.345$ で弱い相関が認められた ( $p < 0.05, p < 0.01$ )。面接, 基礎学力試験および高校評定平均値と1年次学業成績との間には, 相関は認められなかった。

#### 5) 一般入試入学者の入試成績と1年次学業成績との関係

一般入試入学者の入試成績と1年次学業成績との間の相関係数は表5の通りであった。一般入試入学者の入試成績の平均点数と1年春学期, 1年終了時, 学部共通および専門基礎GPAの間の相関係数は,  $\rho = 0.282 \sim 0.317$ で弱い相関が認められた ( $p < 0.01$ )。また入試成績の平均点数と全学共通GPAの間の相関係数は,  $\rho = 0.208$ で弱い相関が認められた ( $p < 0.05$ )。

表 6 一般試験入学者の入試教科別成績と各 GPA の相関

		1 年春学期	1 年終了時	全学共通	学部共通	専門基礎
英語	相関係数	0.217	0.166	0.070	0.183	0.203
	有意確率	0.052	0.137	0.533	0.101	0.069
	N	81	81	81	81	81
数学	相関係数	0.066	0.117	0.095	0.130	0.074
	有意確率	0.631	0.391	0.487	0.338	0.590
	N	56	56	56	56	56
国語	相関係数	0.142	0.140	0.083	0.241	0.035
	有意確率	0.447	0.452	0.657	0.192	0.854
	N	31	31	31	31	31
理科	相関係数	0.207 *	0.188	0.209 *	0.117	0.230 *
	有意確率	0.046	0.071	0.045	0.263	0.027
	N	93	93	93	93	93

相関係数；Spearman の順位相関係数

有意確率；両側

\*  $p < 0.05$ 

## 6) 一般入試入学者の入試科目別成績と1年次 学業成績との関係

一般入試入学者の入試科目別成績と1年次学業成績との間の相関係数は表6の通りであった。理科の入試成績と1年春学期、全学共通および専門基礎GPAとの間の相関係数は、 $\rho = 0.207, 0.209, 0.230$ で弱い相関が認められた( $p < 0.05$ )。しかし、英語、国語、数学の入試成績と1年次の各学業成績との間には、相関は認められなかった。

## 考察

### 1. 入試区分からみた入学後の動向の調査結果

本学科は、2006年4月に開設され、2010年3月に最初の卒業生を送り出したが、2006～2009年度に本学科へ入学した合計335名のうち、3年生終了時までには14名(4.2%)が退学・除籍しており、転学部・転学科を含めると27名(8.1%)が進路変更した。入試区分からみると、進路変更をする者は推薦入試群が学力型

入試群に比べて多いことが認められた。

他大学などの報告をみると、柳沢ら<sup>5)</sup>は推薦入学では一般入学に比べ退学・除籍者が多い傾向が認められたと報告しており、本岡ら<sup>6)</sup>、西川ら<sup>7)</sup>の報告においても同様な結果が示されている。一方で難波ら<sup>8)</sup>の報告では、退学者の割合は、推薦入試者が最も少なかったとされている。本学科では、学力型入試群よりも推薦入試群において、退学・除籍および転学部・転学科をした者の割合が高く、進路変更先としては他分野への異動が多かった。

推薦入試による入学者は、学力型入試による入学者と比較して進路の選択時に理学療法士を目指すという目的意識をもっている者が多いことが予測されたが、本調査の結果では推薦入試による入学者のうち11.2%の者が進路変更をしていた。柳沢ら<sup>5)</sup>の報告では、推薦入試による入学者では、就学継続の意志や国家試験取得に関する意欲面などの学力以外の要因が、一般入試の学生に比べ低下していることを示唆している。本学科においても、推薦入試群による入学



者のうち進路変更を行った学生は、専攻分野における就学継続意志の低下、入学時の進路選択に対する曖昧さ、学業成績不振であり、推薦入試の際には、理学療法士の養成課程を修了し得る学修能力と理学療法士としての適性をもった人材を選抜する方法の検討が必要であると考えられた。

## 2. 各入試区分による学業成績の比較

今回、推薦入試による入学者は、一般入試による入学者より学力的に差が生じていると考え調査したが、1年次学業成績の比較において、指定校推薦群は、学部共通GPAの平均値において後期入試群と有意差を認めた。さらに全体的にみると1年次学業成績としては、推薦入試群の方が一般入試群より良好な成績を示している。推薦入試による入学者は、高校時代に学業などを比較的眞面目に取り組んできた者が多く、その影響で1年次学業成績は推薦入試群の方が良好な成績を示したと考えられた。

他大学などの入試区分別に学業成績を比較した研究について、飯田<sup>9)</sup>は理学療法学科では一般入試群の方が良好な成績を修めていると報告しており、本岡ら<sup>6)</sup>の報告も、教養科目、専門科目および教養・専門全科目において、一般入試群の平均点が推薦入試群よりも高い傾向にあり、理学療法学科では、教養科目と教養・専門全科目において有意差を認めたと報告している。これらは今回の我々の結果とは逆の結果であり検討の余地がある。実際本学科においては、学年が進行するにつれて専門科目が増え、履修科目の傾向が変化するため、今回末調査の2年次以降の動向についてさらなる調査、検討が必要であると考え。さらに他の医療技術者養成校の報告において、西川ら<sup>7)</sup>は、一般入試群の1年次学業成績が推薦入試群の1年次学業成績

に比べて有意に高かったこと、尾崎ら<sup>10)</sup>は、成績(学説)はいずれの時期においても推薦入試、現役以外の一般入試、現役の一般入試の順に高い得点を示したが、推薦入試と現役の一般入試者の1年後学期および2年前学期の学業成績のみに有意差が認められたとしている。また難波ら<sup>8)</sup>は、入試方法の違いによる入学後の成績を基礎教養科目と専門科目に大別して検討した結果、基礎教科科目全体では、特別入試者、推薦入試者、一般入試者の順に、専門科目全体では推薦入試者、特別入試者、一般入試者の順にやや良好な成績を示したと報告している。従って推薦入試を否定しない結果が多いことも考慮し、引き続き調査し検討したい。

## 3. 入試成績と1年次学業成績との関係

今回の調査では、指定校推薦入学者において、小論文の成績と1年春学期および1年終了時GPAとの間に弱い相関が認められた。また高校評定平均値は全学共通科目群を除く1年次学業成績との間に弱い相関が認められた。一方、一般推薦入学者においては、小論文の成績と1年終了時および全学共通GPAとの間に相関が認められたのみで、面接、基礎学力試験および高校評定平均値と1年次学業成績との間には、相関は認められなかった。本岡ら<sup>6)</sup>は、推薦入学者について、小論文成績と評定平均が学内成績との間で弱い正の相関を示したが、面接の成績は学内成績との相関はみられないと報告しており、指定校推薦入学者における本調査の結果は、本岡ら<sup>6)</sup>の報告と同様の結果となった。指定校推薦入学者においては、高校評定平均値と1年次履修科目群との間に相関がみられるため、評定平均が指標として有効であることが予測された。また一般推薦入学者では、小論文の成績が1年次学業成績の一部と相関を示し

たのみで、面接、基礎学力試験および高校評定平均値との間で相関を示さなかった。そのため、一般推薦の選考方法については、高校調査書の内容なども考慮し、理学療法士を目指す意欲と適性をもった人材を選抜できるような方法を、今後さらに検討していく必要があると考えられる。

推薦入試による入学者は、一般入試による入学生より学力的に劣るのではないかと危惧されたが、推薦入試による入学者は一般入試による入学者より1年次学業成績において良好な成績を示しているため、入学時の成績より、入学後の学業への取り組みが学内成績に影響すると考えられた。

一般入試入学者の入試成績平均点と1年次学業成績との間には、弱い相関が認められ、入試選択教科では、理科の入試成績と1年次春学期、全学共通および専門基礎GPAとの間に弱い相関が認められた。しかし、英語、国語、数学の入試成績と1年次の各学業成績との間には相関は認められなかった。末永ら<sup>11)</sup>は、入試科目中、数学、国語、理科と大学成績とは相関関係がなく、英語、入試合計、および高校成績と大学の総合成績とは低い相関関係がみられたと報告しており、同様に西川ら<sup>7)</sup>も一般入学者においては入試総計および入試国語と1年次学業成績との間に関係があったと報告している。また中村ら<sup>12)</sup>は、入試科目とは相関はみられなかったが入試総合点とは相関がみられたと報告している。一方で、柳沢ら<sup>5)</sup>は、入試成績と学内成績の間には相関を示さないと報告している。今回の調査では、末永ら<sup>11)</sup>、西川ら<sup>7)</sup>、中村ら<sup>12)</sup>の報告と同様に、入試成績と1年次の学業成績との間の関係において弱い相関を認めた。しかし、選択教科の科目では異なる結果となった。本学科の入試では、一般入試の前期入試および中期

入試では、2教科型と3教科型のいずれかで受験が可能であり、それぞれで必須科目および選択教科が異なる。また後期入試では、英語、数学、国語、理科の4教科から、2教科選択する方式で行われている。理科については、いずれの入試においても、物理、化学、生物のうち1教科選択となっている。理系のみならず、文系からの受験に不利にならないように配慮されているが、実際には受験科目において理科を選択する人数が多く、選択科目にばらつきがあり、現段階では理科の入試成績と1年次の学業成績との間に関係があるとは言い難い。本学科の専門基礎科目の中には、教養をアドバンスさせたような理系科目も配置されており、高校時代の学習と関連をもつ教科もあるため、このような結果になったと考えられる。

今回の調査ではデータの整っている1年次の学業成績に限定し、入試成績と1年次の学業成績との関係をみているのみであるため、入試成績と2年次以降の学業成績との関係、臨床実習の成績との関係および国家試験合格率との関係について、今後さらなる調査、検討が必要であると考えられる。

## まとめ

2006～2009年度の入学者に対して、入試区分の違いによる1年次学業成績の比較を、本学の学内成績基準であるGPA評価を用いて行った。その結果、

- (1) 退学・除籍および転学部・転学科する者は、推薦入試による入学者に多く認められた。
- (2) 1年次学業成績は、指定校推薦群、一般推薦群、前期入試群、後期入試群の順に高い傾向を認めた。1年次学部共通GPAにおいて、指定校推薦群と後期入試群に有意差を認めたのみ



で、その他は1年次学業成績において入試区分の違いによる有意差は認められなかった。

(3) 指定校推薦入学者において高校評定平均値は、全学共通科目を除く1年次学業成績との間に弱い相関を認め、小論文の成績は、1年春学期および1年終了時GPAとの間に弱い相関を認めた。

(4) 一般推薦入学者において、小論文の成績は、1年終了時GPAと全学共通および学部共通GPAとの間のみに弱い相関を認め、基礎学力試験成績、面接、高校評定平均値との間には相関が認められなかった。

(5) 一般入試入学者では、入試成績の平均点と1年次学業成績との間に弱い相関を認め、入試科目別成績においては、理科の得点が、1年春学期、全学共通、専門基礎の学業成績に弱い相関を認めた。

今回の調査では、入試区分の違いによる1年次学業成績の比較を行ったのみである。そのため、学業成績に最も影響を及ぼす要因については、十分な資料が得られていない。今後の課題として、各入試における選考基準や合格判定方法の見直しを行うためには、入試成績が2年次以降の学業成績に与える影響、高校調査書と学内成績との関係、入試成績および学内成績と国家試験合格率との関係などを調べ、さらに比較検討する必要がある。

## 文献

- 1) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1296403.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1296403.htm) (参照 2010-09-13)
- 2) <http://www.soc.nii.ac.jp/jpta/school.html> (参照 2010-09-13)
- 3) 社団法人日本理学療法士協会発行：第4章 理

学療法士の教育，理学療法白書2007：67-102，2008.

- 4) 杉浦昌己：大量養成時代に求められる教育—私はこう考える 養成施設教員としての立場から，PTジャーナル 43(1)：19-20，2009.
- 5) 柳沢健，新田收，他：東京都立医療技術短期大学生の入学・在学時成績と医療系国家試験合格との関係，東保学誌 2(4)：276-281，2000.
- 6) 本岡直子，岩谷和夫，他：広島県立保健福祉短期大学における入試方法・成績，学内成績，国家試験合格との関係，広島県立保健福祉大学誌 人間と科学 3(1)：95-104，2003.
- 7) 西川智子，日垣一男，他：作業療法学科における入学者選抜方法と入学後の経過について—藍野医療福祉専門学校における追跡調査から—，藍野学院紀要 14：73-81，2000.
- 8) 難波哲子，岡真由美，他：川崎医療福祉大学感覚矯正学科視能矯正専攻学生における入学者選方法と入学後の経過—1995年～2004年卒業生について—，川崎医療福祉学会誌 15(1)：183-190，2005.
- 9) 飯田義裕：推薦入学試験による入学生と一般入学試験による入学生との入学後の学業成績の比較，群大医短紀要 15：1-9，1994.
- 10) 尾崎順男，市川基，他：入学試験方式の違いによる学生意識と学業成果について，日歯教誌 20(2)：412-425，2005.
- 11) 末永義圓，真木誠，他：本学作業療法学科学生の入試成績と入学後の学業成績に関する調査研究，北海道大学医療技術短期大学部紀要 8：23-27，1995.
- 12) 中村伴子，山田拓実：作業療法学科学生の入学成績と学業成績との追跡研究，作業療法 11(4)：366-370，1992.
- 13) 奈良勲，洲崎敏男，他：理学療法学科の学業成績に関する研究，理学療法学 15(3)：235-238，1988.
- 14) 永峰卓哉，山崎不二子，他：看護学科入学生の入試成績と学内成績の関係，県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部紀要 8：29-39，2007.